

---

# ポケモンBW 黒き光と白き闇

アクラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケモンBW 黒き光と白き闇

### 【NZコード】

N4451X

### 【作者名】

アクラ

### 【あらすじ】

ギンガ団壊滅から4年、プラズマ団壊滅から1年がたち、平和が続いていた。そんな中、ギンガ団とプラズマ団が手を組んだといううわさが流れになる…

さまざまにころに潜入調査し、依頼主にそこで得た情報を報告するスパイ。その中のスパイ組織の一つ“ローレンス”の一員であるソルがスパイ先で度々ギンガ団とプラズマ団を見るようになる…

## プロローグ

「ここがイッシュ地方か。」

俺はソル。他人から見れば俺は普通のポケモントレーナーに見えるだろう。

「フルルル……ポケギアか。」

「俺だ。いま、イッシュ地方に着いたところだ。」

でも、俺はただのポケモントレーナーじゃない。

俺の本職はポケモントレーナーじゃない。

俺は、……スペイだ。俺がイッシュ地方に来たのも、依頼のためだ。

「そろそろ着いた頃かと思つたよー。とこひで、今どこの街にいるのー？」

「ヒウンシティといつといろの港だ。それで、依頼場所はどこにある？」

今、ポケギアにでたのはジリア。俺の幼なじみだ。

「ソルつたら、せつかちなんだら。ちょっとぐらい観光でもすればいいのにー。」

「早く依頼を済ませたいんだ。それに観光なら、依頼が終わってからするつもりだ。」

「やうなー。じゃあ、依頼場所いうね。6番道路にある、“フキミセのほらあな”ってところだよ。今説明するのもあれだから、6番道路についたら電話してねー。」

6番道路か、確かホドモエシティからが一番近かつたつけ分かつた。着きしだい連絡する。」「うん。じゃーねー。」

「ツー、ツー、

「よし、じゃあ行くか

こうして、俺のイッシュ地方で初めてのミッションが始まった。

## プロローグ（後書き）

アクラです。

初投稿で、書き方とかよくわからないけど、応援して下さったから  
嬉しいです！

読んで下さってるかたありがとうございますー！

## 第一話 フキヨセの洞穴へ

「えーと、ホドモエシティは、ここか。」「うわっ、結構遠いな（汗）歩いて行くのは無理か。となると、「ここで飛ぶと人目につくから……ヤグルマの森かな。ここなら人、あまりいないだろう。」「で、ヤグルマの森まで行こうとしたんだが……

（20分後）

「（汗）（汗）

俺は若干方向音痴な所があるんだよな（汗）しかもこの人ごみだ。余計迷う。ダメだ、誰かに聞こう（汗）

「ありがとうございます。」

やつとこれたよ（汗）どうやらヤグルマの森とは反対方向に進んでたらしい。

「改めて、行くか。」

「ヤグルマの森」

思つたより広いな、また迷いそうだ（汗）まあ、人がほとんどないから動く必要もないんだが、

「出でこい、フワライドー」「フワーン」

腰につけたモンスターボールを投げ、赤い閃光とともにフワライドが出てきた。

「フワライド、ホドモエシティまで飛んでくれないか。」

そういって俺は、イッシュのタウンマップを出した

「ここだ、分かるか？」「フワ～

フワライドはうなずくと俺に掴まれとアピールした  
「〇〇。行こうか。」「フワーンー！」

### 「ホドモエシティ」

「ソノガホドモエシティか。（イッシュの玄関と呼ばれ、多くの品  
物が流通する港街）か。」

港街か、直接ここに来たらよかつた（汗

「えつと、6番道路は…」

あつた、今度はちゃんとポケナビ見ながら行こう（汗

### 「6番道路」

プルルル、プルルル、

ジリア「もしもしー」

ソル「俺だ、」

ジリア「あ、ソルー、遅かつたじゃーん

ソル「ヒウンシティ思つたより広いんだよ！で、フキヨセの洞穴は  
どこなんだ？」

ジリア「その前に！ちゃんと依頼内容覚えてる？」

ソル「ああ、フキヨセの洞穴に、最近妙な連中が出入りしてるから、  
そいつらをとつちめて欲しいんだつけ。」

ジリア「そうそう、じゃ、洞穴の場所いつよ。えつとまば…」

（10分後）

### 「フキヨセの洞穴」

ソル「ありがとう。これから潜入を開始する。」

ジリア「頑張ってねー」

ツー・ツー・カチャツ

妙な連中か、こんなところで誰が何をやつてるんだ  
とりあえず進まなきや始まらないな

「行くか。」

俺は、少し疑問をいただきながら奥へ進んだ。

## 第一話 フキコセの洞穴へ（後書き）

おわり方こんなかんじでいいのかな

## 第一話 依頼遂行（前書き）

久しぶりの更新です（汗  
時間がかった割に下手というね  
w

## 第一話 依頼遂行

「フキヨセの洞穴 2階」

「ここか、依頼主が言つてたのは、  
とりあえず奥まで来てみたんだが、  
見張りがいて、下手に近づけない。」

「見たところ4人か……」

見張りは2人、なんとかなるか。

俺は見張りの2人の背後にまわり、首筋に手刀をかましてやつた。

「がつ……！」

「なつ……！」

バタッ

まずは2人つと、

「誰だ！」

「なにをしている！」

ちつ、ばれたか。こうなつたら…

「いけ、バクフーン！」

俺はモンスターボールを放り投げた

ポーン！ 「バクー！」

「バクフーン、ふんかだ！」 「バク、バークー！」

俺が指示すると、バクフーンは背中の炎からあいつら足下に赤い光線を放つた

「がはつ！」

「ぐはつ！」

「よし、全滅完了つと。バクフーン、ちょっと周りを照らしておいてくれないか。」

「バクツ！」

「ありがとう。さて、何かないかな…ん、」

「この土、少し盛り上がってるな。何か埋まってるのか?」

俺はそこを掘り起こしてみた。

「これは……！」

宝石だ、それもたくさん!」

こいつら盗人だったのか(汗

とつあえず、これで依頼完了だな。

俺は洞穴を後にした。

「」協力、感謝します…。」

「はい、頑張って下せ!。」

俺は洞穴から出たあと、とつあえずジョンサーさんにて通報しておいた。

あこつらがのびてたままじや、どうじみつもないしな

「さて、依頼も終わったし、帰るか。」

「ホドモHシティ ホドモ工市場前」

ソル「……今回の依頼は完了だ。」

ジリア「OK~、リーダーにそつぱんとくよ~」

ソル「じゃあ、しばらくしたらそつぱんとくよ~」

ジリア「OK~。じや、またねー。」シーチー、

「さて、とつあえず休むか。」

俺はポケモンセンターへ歩いて行つた

## 第三話 ライモンの友人（前書き）

いいタイトルが思いつかばんへへ；

俺はポケモンセンターを出で、ライモンシティへ向かつた

「これがホドモ工の跳ね橋か・・・・、」

「ハイで飛んで来たから分からなかつたが、思つたよりでかいな（汗）

今は跳ね橋は下ができるみたいだし やはりあと行くか

## 【ライモンシティ】

「ここがライモンシティか。

また迷いかねないな（汗

「じつとしても仕方ないし行くが」「俺は待ち合わせ場所に向かった

A vertical decorative border on the right side of the page, consisting of a series of small, black, wavy lines.

・・・・遅いなあいつまた道に迷つてるのか？

あ、やつと来た

ソル「道に迷つてた（汗）

ソル 「・・・・そ、それより何だ話つて」

実はお前にこれを渡せつて頼まれたんだ。

そして、俺は白い封筒をソルに差し出した

ソル 「頼まれたって誰にだよ？」

そう言いながらソルは封筒を開けた

ニクス 「知らん。ポケモンセンターで頼まれたんだ。」

ソル 「そうか・・・まあいいか、この手紙の内容を見れば分かる。」

そう言つとソルは手紙を読み始めた

しかし、せつかくこいつを呼んだんだからなんかやりてえな・・・  
そうだ！

ニクス 「おい、ソル！」

ソル 「何だ、いきなり。」

ニクス 「なあ、いつしょにギアステーション行かねえか？」

ソル 「ここ地下鉄駅のことか。何でそんなところ行くんだ？」

ニクス 「あそこはバトル施設でもあるんだ。」

ソル 「あそこはバトル施設でもあるんだ。」

ソル 「で、いっしょに挑戦しようど。」

ニクス 「ああ、そうだ。」

ソル 「・・・でも俺、今から手紙に書いてるところに行くんだが・

・

ニクス 「いいから行くぞ！」

ソル 「ちよつ！ニクス！」

俺はソルを（むりやり）ひっぱりながら、ギアステーションへ向かつた

## 第三話 ライモンの友人（後書き）

今回は途中から主觀変えて見たんですがどうでしょうか？

## 第五話 サブウェイマスター登場！！（前書き）

すいません、遅くなりました（汗  
3週間ぶりの更新です。  
サブマスクちかしい・・・

## 第五話 サブウェイマスター登場！！

ニクスに（無理やり）連れて来られて  
今俺は、ギアステーションに来ていた。

ソル 「ニクス、雑過ぎるぞ（汗）

それに、早くこの手紙のところに行きたいんだが・・・

ニクス「堅いことうな。

それに船の出航の時間までまだまだなんだろう？

ソル 「それはそうだが・・・」

ニクス「だつたら早く行こ。まづせ。」

ニクスはそう言つて足を速めた

~~~~~

ソル 「・・・ニクス、さつきから誰を探してるんだ？」

ニクス「サブウェイマスターだ。」

ソル 「誰だそれ？」

ニクス「さつき言わなかつたか？」

ここママスターであり、車掌でもあるやつだ。  
いつもいろいろ辺にいるんだけど・・・お、いたいた。」

ニクスが歩いて行った方向を見ると2人の車掌らしき人が立っていた。

1人は黒、もう1人は白の車掌服を着ている

ニクス「よ、ノボリ、クダリ。久しぶり。」

ノボリ「これはこれはニクスさん。お久しぶりでござります。」

クダリ「久しぶり」

この二人がノボリとクダリか。

ずいぶん似てるな、双子なのか？

ノボリ「ところでそちらのかたは・・・」

ニクス「ああ、こいつはソル。俺の友人だ。」

ノボリ「そうでしたか。ソルさん、よろしくお願ひします。」

ソル「こちらこそ。」

かなり丁重なひとだな

そういうえばあのクダリって人、「久しぶり」以外なにも喋つてない  
な（汗

ニクス「なあ、あいてるか？」

ノボリ「大丈夫でござります。どうぞこちらへ」

相当親しいんだな

俺たちはノボリに連れられて歩いて行った

~~~~~

しばらく歩いてたら一本の地下鉄の駅に着いた。

ソル 「ノボリさん、バトルをするんじゃ無かつたんですか？」

ノボリ 「はい、ここはバトルサブウェイと言つて、車両の中でバトルができるようになっています。ここでバトルをするのでござります。」

ソル 「そうなんですか。」

ノボリ 「そ、陛下さん」乗車ください。」

~~~~~

バトルするだけあつてなかなか広いな。  
それでも普通のバトル場よりはせまいな。

ノボリ 「さて、バトルの準備はよろしいでしょうか。」

ノボリ 「さて、改めて自己紹介させていただきます。

わたくしサブウェイマスターのノボリと申します。」

ノボリ 「隣にいいますのは同じくサブウェイマスターのクダリでございます。」

ノボリ 「さて、ソルさんと二クスさん。」

あなたたち2人が弱点を補い合うのか、はたまた圧倒的な力で押し通すのか、

何にせよあなたたちといいバトルが出来ると期待しております。」

ノボリ「それではクダリ、何かあればどうぞ。」

クダリ「ルールを守つて安全運転！」

「ダイヤを守つて皆さんスマイル！」

「指差し確認、準備オッケー！」

「目指すは勝利、出発進行！！」

## 第五話 サブウェイマスター登場！！（後書き）

最後の方はゲームの台詞そのままです（汗  
あと、今回は文と文の間隔を開けて書いてみました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4451x/>

---

ポケモンBW 黒き光と白き闇

2011年11月21日12時11分発行